

## 科学研究費補助金研究成果報告書

平成 23 年 6 月 1 日現在

機関番号：32612

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2009 ～ 2010

課題番号：21830106

研究課題名（和文）留学とアイデンティティの形成 中国人の日本留学を中心にー

研究課題名（英文） Going abroad to study formation of identity  
Chinese going to Japan to study mainly -

研究代表者

青木 正子（AOKI MASAKO）

慶應義塾大学・法学部・講師

研究者番号：90548249

研究成果の概要（和文）：中国人大学生が中国から日本へ国境を越えて行き来をした時のアイデンティティの変化を調査し、文化触変の現象を考察するために、中国北京で、1，2年の日本留学に行く前の中国人大学生と1，2年の日本留学を経て帰国したばかりの中国人大学生にWAI法（20の私テスト）を実施した。量的分析を行った結果、日本留学を経験した中国人大学生は自分に自信が出て、前向き志向になり、日中友好の必要性を感じるようになっていることが示された。しかし対日感情には大きな変化はみられなかった。

研究成果の概要（英文）：The WAI law was executed to the student before it went to go to study to Beijing of one year or two year and after it had returned home.Result of quantitative analysis,it was shown that the Chinese international student who paseed going Japan to study occurred to the self confidence and had become a positive intention.

交付決定額

（金額単位：円）

|         | 直接経費      | 間接経費    | 合 計       |
|---------|-----------|---------|-----------|
| 2009 年度 | 1,070,000 | 321,000 | 1,391,000 |
| 2010 年度 | 960,000   | 288,000 | 1,248,000 |
| 年度      |           |         |           |
| 年度      |           |         |           |
| 年度      |           |         |           |
| 総 計     | 2,030,000 | 609,000 | 2,639,000 |

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：国際関係論

キーワード：留学、文化触変、中国人、アイデンティティ

## 1. 研究開始当初の背景

私は2002年に「WAI 技法による在日中国人留学生の自己イメージ」というテーマの研究を行い、日本カウンセリング学会で発表した。この研究では多々ある質問紙の誘導作用によるアンケート調査の有効性の低下を避けるため、アンケート調査ではなく、トータルパーソナリティが測定できる自由回答法である心理アセスメントである WAI 法（20の私テ

スト）を使って、国境を越えて動く留学生の内面の変化を、アイデンティティのレベルで数量的に測定した。

その結果、滞在期間が長くなるほど、内面的、社会的アイデンティティは安定し、生活上の困難が減少し、友人も増えたが、対日感情は悪化傾向にあり、祖国を想う気持ちが高まる、との結論を得た。しかし、アイデンティティは安定し、生活上の困難が減ったにも関わらず、どう

して対日感情が好転しないどころか、むしろ悪化傾向にあるのだろうか。私はこの研究成果にずっと疑問を抱いていた。若い中国人留学生は日本という自由民主主義の国に来て、視野が広がり新しいことを多く発見し、学ぶことは多く、成長することが多いはずである。しかし、私が用いた分析方法は心理学界ですでに認知されている方法であり、調査の実施方法、分析方法に問題がないため、カウンセリング学会で指摘を受けることはなかった。

その後かつて東京大学に訪問学者として滞在されたことのある、北京大学中文系の張武教授の書物を読み、私の研究の問題点に気づいた。張教授は、自分は2年後に北京に戻る客人で、長く滞在する留学生や留学後も日本に残って就職し生活し続ける中国人からみれば自分は客人で、何も日本のことがわからない中国人に見えるだろう。しかし、客人だからこそ見えることもある、と述べている。

私が比較した2群は来日2年未満と来日2～6年の中国人である。来日2年未満の中国人は国境を越えて動いてきたばかりの中国人である。しかし来日2～6年の中国人は日本で動かなくなった中国人であり、その多くがおそらく今後も長く日本に滞在する可能性が高い中国人である。

そこで私は、後者の中国人の不満や訴えは留学生問題をいうよりは、むしろマイノリティ問題としてとらえた方が妥当で、中国に戻ることを前提とした中国人留学生とは分けて考えるべきではないか、と考えるようになった。そして私の研究はそこを分けて考えなかったために、留学の積極的な意義が誤解されるものとなってしまったのではないかと考えるようになった。

そこで新たに、国境を越えて動いてきたばかりで、帰国を前提とする中国北京の大学に在籍する中国人留学生のみを対象にした研究をし、2つの体制の違う国の間を動く留学生の内面の変化を測定し、国際交流の積極的な意義を検証したいと考えるようになった。

これがこの研究開始当初の背景である。

## 2. 研究の目的

まず、この研究は今までの社会学、教育学、国際学など既成の理論枠組みに、臨床心理学のアプローチを加味して、新しい学際的なアプローチを開発し、「ヒ

トの国際移動におけるアイデンティティの形成の研究」として運用する。これはこの研究の独創的な点である。

次にこの研究は、ヒトの国際移動によって触変されるアイデンティティの形成を数量的に測定し、国際的な文化触変とそれがもたらす国際関係の変容に対して、より科学的な論拠を提供することを目的とする。とりわけ、北京の若きエリート中国大学生が、異なる体制の国に、国境を越えてきた中で起こる内面の変化、個々の成長、たとえばアイデンティティの変化、安定など、トータル的な変化、成長を数量的に明らかにすることによってからも、国際交流の積極的な意義を検証できると考えている。

さらに、中国大学生は日本での留学を経験し、日本に対する理解が深まり、帰国後は国内に日本の良い側面を発信してくれるだろう。中国の将来を担うエリート大学生の発信は非常に大きな影響を及ぼし、日中関係の発展に大きく貢献するだろう。この面から日中間の国際交流の積極的な意義が検証できると考えている。

この研究の目的を整理すると、以下の4点になる。

- (1) 今までの社会学、教育学、国際学等既成の理論枠組みに、臨床心理学のアプローチを加味して、新しい学際的なアプローチを開発し、「ヒトの国際移動におけるアイデンティティの形成の研究」として運用する。
- (2) ヒトの国際移動によって触変されるアイデンティティの形成を数量的に測定し、文化触変とそれがもたらす国際関係の変容に対してより科学的な根拠を提供する。
- (3) 国境を越えてきた若きエリートである留学生の内面の変化、個々の成長などアイデンティティのトータル的な変化を数量的に測定し、明らかにし、国際交流の積極的な意義を検証する。
- (4) 帰国後の留学生の発信を分析し、それらからも日中間の国際交流の積極的な意義を検証する。

## 3. 研究の方法

WAI法(20の私テスト)は「私は誰でしょう?」という問いに対して20通りの回答を母国語で自由記述してもらう心理アセスメントである。「私は誰でしょう?」という簡単な刺激によって、

被調査者の独自性が反映されやすく、多様な反応が得られ、かつ比較的多くのデータをある程度数量的に分析することができる。

この研究の具体的な方法は以下である。

- (1) WAI 法(20の私テスト)を北京で日本留学前と帰国後の中国人大学生に実施し、得られた回答をKJ法(川喜多二郎が開発。1994)を使って分類し、カイ二乗検定を使って差の検定を行う。
- (2) WAI 法(20の私テスト)以外にインタビュー調査も実施し、質的分析も試みる。
- (3) 得られた結果を分析し、「ヒトの国際移動におけるアイデンティティの形成の研究」という新しいアプローチを開発する。
- (4) 国際交流の積極的な意義について検証する。

#### 4. 研究成果

北京の大学で日本へ1、2年間の交換留学に行く前と帰国後の学生にWAI法(20の私テスト)を実施し、KJ法を用いて内容分析を行った。その結果、12の大項目と54の小項目のカテゴリーを作成した。さらにこのカテゴリーを用いてすべての回答を量的分析をした結果、日本留学を経た中国人大学生は前向き志向になったことが示された。具体的には自分に自信が出て、日本語が上達し、日本語学習を肯定的にとらえるようになっていく。また、親しい日本の友人も増え、現状に対する不満も減り、生活全般が穏やかになっている様子が示された。さらに帰国後は日中友好の必要性をより強く感じるようになっており、日中間の留学の積極的な意義が示された。このように1、2年間という短い時間ではあるが、日本という相対的に落ち着いた環境の中で、20歳前後の北京の大学生の内面が大きく成長したことが今回の調査で明らかになった。

以上の結果は、今後の日中関係に良い影響を及ぼし、国際関係の変容を促す要因となっていくだろう。

しかし、その一方で、インタビュー調査と自由記述調査を質的に分析した結果、日本留学中に対人関係に困難を感じた学生が多くいたことが明らかになった。

日本留学中に対人関係に困難を感じた学生の多くは、来日前から日本に対してネガティブな感情を少なからず抱いていたことも明らかになった。

対人関係と対日感情の間には相関関係が

あることは多くの先行研究で明らかになっている。対人関係に困難を感じた学生は、来日後も対日感情が大きく好転することは少ないことも明らかになった。

一方で、来日前から日本に対して好感を抱いていた学生は、来日後、対人関係がいくつまくいくケースが多く、対日感情も来日後さらに好転していくことも明らかになった。

#### (今後の課題と展望)

中国留学生の対日感情の良し悪しは、国際間の変容に大きな影響を及ぼす。この点の分析は今後の課題であるが、私は中国人個人のパーソナリティに関係があるのではないかと考えるようになった。そして、そのパーソナリティにあった援助や配慮が適してしなかったために、対人関係が難しくなり、結果として対日感情が好転しなかったのではないかと考えている。

言い換えれば、そのパーソナリティを把握し、それにあった援助や配慮があれば、より多くの中国人留学生が対人関係と対日感情において、良好な作用を及ぼすのではないかと思うのである。

つまり、日本人とよく付き合う状況を選択した中国人学生は、日本人の空気を読むことが上手なパーソナリティをもっているのではないかと、そのようなパーソナリティこそが、状況選択の重要な動機要因になっているのではないかと思うのである。

この動機的要因を解明するために、私は対人社会心理学のアプローチであるセルフモニタリング理論に注目した。

セルフモニタリングとは、自己呈示、自己表現行動をモニターし、コントロールすることである。マークスナイダー(1974)によってセルフモニタリングを測定する尺度も開発されている。スナイダーによれば、日本人は典型的な高セルフモニターである。高モニターの人はその時の状況をみて最も適当だと思われる自分を表にだし、状況が異なると自己呈示の仕方を変えるタイプで、いくつもの自己をもってうまく使い分ける。一方、低モニターは自己が一つで自分の信念に忠実で、他人に合わせて自分を変えることはしない。

ルースベネディクトは『菊と刀』の中で「罪の文化」と「恥の文化」に分類し、日本人を後者とし、自己の信念に忠実な前者を優位としたが、スナイダーはその間に価値観を入れていない。マークス北村(1991)によると、西洋においては社会的文脈から独立した単一的安定的な相互独立的自己が尊重されるのに対して、東洋においては社会的文脈に依存した柔軟かつ変動的な相互協調的自己が尊重される。

高モニターが多い日本人からみると中国人は低モニターに見えるが、中国人も同じく高モニターである。

しかし私は同じ高モニターでも違いがあると考え、急きょ中国人大学生と日本人大学生に対して、セルフモニタリング調査を実施した。

t 検定を行って比較した結果、「人を喜ばせたり機嫌と取ろうとして自分の意見や行動を変えたりしない」は中国人大学生の方が、有意に高かった。また「本当は嫌いな人でも親しげに振る舞うことができる」と「必要なら相手の目を見てウソをつくことができる」は、日本人大学生の方が有意に高かった。

以上の結果から、常に周囲をモニターしながら、他人に合わせて自分を抑制し、嫌いな人とも表面的にはうまく付き合う日本人大学生と、他人に合わせて自分を抑制したりせず、嫌いな人とは親しくしない中国人大学生という違いが示された。

以上のような異なるパーソナリティをもつ中国人留学生は来日後に多くの場面で困難を感じることは容易に想像できる。

留学というヒトの移動は、国際関係の変容をもたらす要因となりうる。国際交流をより積極的なものにするためには、当事者であるヒトのパーソナリティに注目し、状況選択の動機要因を明らかにしていく、という視点を加味することは有効であるのではないか。

以上のような視点を加味し、今後は「ヒトの国際移動におけるトランスナショナルアイデンティティ形成のメカニズムの研究」として新しい学際的なアプローチを開発して運用していきたいと考えている。

## 5．主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計2件)

青木正子、松原達哉、中国留学生の来日前と帰国後の自己イメージの変化、カウンセリング学会43大会発表論文集、査読なし、2010、159 - 159

青木正子、松原達哉、中国の幼児教育、国際幼児教育研究、査読有、第17巻、2009、69 - 74

〔学会発表〕(計1件)

青木正子、松原達哉、中国留学生の来日前と帰国後の自己イメージの変化、日本カウンセリング学会、2010年9月4日、文教大学越谷校舎

## 6．研究組織

### (1)研究代表者

青木 正子 (AOKI MASAKO)

慶應義塾大学・法学部・講師

研究者番号：90548249